年間選者賞（平成二十六年七月号～二十七年六月号）

晋樹隆彦選

# 石井すみ子

（平成二十六年十一月号）

二十年まえに逝きたる夫の墓化身のような蛙が居つく

灯籠の中から飛びだす雨蛙　今日は二匹の子どもを連れて

「ケンカなら負けてくるな」とトンカチを彼の日の夫は息子に持たす

居てほしい時にあなたは居なかった大事な娘の嫁ぐ日さえも

われが詠む歌を蛙はもう少し力を抜けとケロケロと鳴く

盂蘭盆の夕べをひらく夕顔の花をつまみにビールをそそぐ

**●作者の言葉**

二十一年前、五十一歳の時の脳内出血で右半身不随となり、自らの身繕いもできない左手で、ノートに書きつけていた言葉が、短歌とも言えない短歌でした。そんな暮らしのなかで悔しさや悲しみが書く事によって小さな喜びに変わりつつある去年の今頃、「心の花」の歌誌に出会って入会。毎月の八首の歌に専念。これで生きる目標が出来たと思える今日、晋樹隆彦先生の思いもかけぬ年間賞に、驚きと感謝でいっぱいです。これからもこの喜びをむちとして励んでいく決意でおります。

**●選者の言葉**

石井さんの表現の特色はどれも無理な力が抜けていて、こころよくイメージが入りこんでくるところにあった。

「化身のような蛙」と亡夫をあっけらかんと詠んでいるのも好感を持った次第。ちょっと蛙に似ていたのかしらと思ったりした。

その蛙、アマガエルであろうか。人生や歌に力を抜けとばかりに剽軽に鳴いている。日常を詠め、飾るなかれと訴えるように。「夕顔の花をつまみにビールをそそぐ」の一首もとてもよい。

まさに日常を大切に、さりげなく日々を暮らしている。